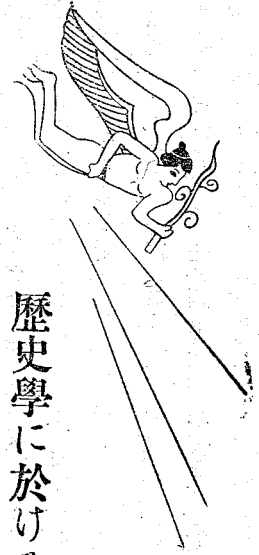


## 熊本大学学術リポジトリ

### Kumamoto University Repository System

Title	歴史學に於ける認識の根本問題 : 論文
Author(s)	内藤, 健
Citation	龍南, 250 : 23 - 35
Issue date	1942-02-15
Type	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2298/8484">http://hdl.handle.net/2298/8484</a>
Right	



## 歴史學に於ける認識の根本問題

文三甲二

内

藤

健

宇宙はその過去の含める或る目的を追求す。而して目的は亦會つて疲るる事なく、恒に退轉す。宇宙に起原なく、又終局無ければ、會て若かりし事なく、又老い行く事もあるべからず。——シュリー・プリュードム——

余ここに歴史認識の問題を論ずるに際し、先づ歴史的認識の對象の何たるか及び如何なるものなるかを問ひて、論を進めんとするものなり。吾人の史學研究の對象は無論時間的空間的に制約せられし一切の人間即ち個人及び集團の活動なり。抑々人間は文化的内容を有するが故にその歴史研究の對象も人間個有の精神活動の痕跡たらざるべからず。而して一切の歴史現象は史學研究の對象たりうるなり。そはすべて文化的内容を有する故なり。要するに歴史研究の對象は過去に於ける一切の人間の所爲と言ふを得べし。歴史現象は一般に言はるゝ如く一回性を有し、同時に反覆せざる存在にして歴史の長き潮流の中にその個有の位置を占有するものなり。而して歴史研究の對象たる歴史的個体はその周邊をなし母胎をなす時間的空間的擴り有り、亦それを形成する人間も個体的に異なる世代を有し、文化空間を異にする故

に歴史的個体の象徴も異なるなり。かくの如く歴史的的存在圈を異にする故に、歴史的現象も時間性によつて異なるなり。されば歴史的現象は一つとして象徴的扮飾を附せざるなく、個性的たらざるはなし。反復的なるもの、類型的なるもの、恒常的なるもの」を歴史認識の對象とする如きも、そは史學研究の根本對象には非ずして、歴史認識を可能ならしむる所の歴史を創造する人間本性の共通性・同性質を根源とするものにして、歴史の眞の姿の認識とは言ひ難し。歴史が一般的なるもの・法則的なるもの・反復的なるものを根源に於て追求すとも何等歴史的價值なし。平易に申さば「財政整理はされば國滅ぶ」てふ歴史的反復法則ありとす、而して史學研究はかくの如き一般的文章を認知するに非ず、史學研究の對象はこの命題を含む特定の歴史現象を問題とし、歴史的扮飾をつけたるままの現象に於て觀察するなり。普遍的概念或ひは簡單化されたる歴史相を完知するは歴史認識の問題に非ず、かかるものは本來無時間的超歴史的概念なり。吾人は固有名詞的なる歴史現象に關して、その背後に潜める普遍的なるものとの代表的關聯を探り行く時、何等かの類型的なるものに逢着するらん。然れどもかくの如き類型は逆に考ふれば、歴史を創造する人間性の類似・人間文化の形式の類似性即ち以て吾人の世界史を認識しうる所以のものを知るに過ぎざらん。吾人は歴史を研究する際、便宜的に類型推理を行ふ。例へば西洋封建制度と我が國封建制度とを對比し、更に明治維新と建武中興を比較研究す。然れどもこれはあくまで便宜的にその状態を想像するのみにして、それを以て方法論的原理とはしえず、その方法には自ら限度あり。眞に個々の現象をその姿に於て知らんと欲すれば、それを特殊性に於て把握せざるべからず。個々の歴史現象は異なる環境に於て發生したれば色彩を異にするなり。環境的個性とは個人的・社會的・地理的・文化的個性、要約せば現象的個性・人格的個性なり。

歴史は些細事實の無數なるものより成立す。然れども無數の些細事實そのものは歴史の對象なりとも歴史そのものたりえず。歴史は一つの完結的全體性を必要とする故に、何らかの整合的契機を必要とするなり。吾人は歴史上の無數の事實を完知する事は不可能なり。而して一斑を知つて全豹を判斷する事は必しも困難ならず。吾人は歴史上の無數の傾

向性に逢遇す。かかる場合傾向性の大きなものを把へて、歴史を形成しゆき或ひは史料を批判して一つの方向を決定す。然らば無數の歴史事象を選択して、一全体性を完結する規範は何ぞや。それは一定の文化價值によつてのみ選擇するものに非ず、文化價值とは論理的想定たる超越的なものとして認める以外に術なきものなればなり。あらゆる人間の事象の廣義の歴史的史料として現はれたるものはすべて文化價值を有すればなり。更に又影響あるもの即ち歴史的對象の如何なるものも、それが嘗て一度世界の内にありたりといふ理由もては純粹にそれ自身のために關心を喚起せず、それが及ぼしし且つ及ぼしつある影響の故に關心を喚起するなり。現在する諸狀態はそれ自身決して歴史の對象には非ず、却つて唯その歴史的に影響ある限りに於てのみ歴史の對象となるといふは勿論誤りなり。過去の歴史に於て現在に影響あるものも勿論あり。然れども過去の歴史事實中その時代にのみ特性をもち、後世に何らの影響なきものは無數あり。古代エヂプトの「インキ」「ピラミット」等は現代にも或ひは他の歴史時代にも影響を及ぼしたるや。それらはその時代に於てのみ個性的意義を有したるのみ。されば無數の歴史事象の選擇の規準は單なる文化價值によつて文化價值なしと主觀的に決定して省られず、或ひは影響力なきが故に歴史的對象の内に入れられざるが如きものに非ず。又歴史を目的論的に敘述し、以てそれ以外の事象を捨て都合よきもののみをとりて強調するものにも非ず。或ひは社會集團に關係あるもののみを敘述するものにも非ず、無數の歴史的事象は一切價值の大小こそあれ、對象たる價值を有するためすべて尊重せざるべからず。而して吾人は歴史敘述をなす場合、歴史家の興味により或ひは研究題目の選擇によつて一部を選擇し他を一時放置するのやむなきに至るなり。されば將棋の歴史も食物の歴史もすべて敘述の價值あるべし。ただ歴史事象をありのまま觀察し、時間系列に關係づけ列記するのみにても充分歴史と言ひ得るなり。要するに歴史を認識するは歴史家なる故、僅些なる歴史事實を感知しその重要性を認識するも彼なり。彼の歴史的關心によつて無數の歴史事實はその繋合の契を得て一つの全体に要約せらるるなり。歴史家は彼の關心によつて彼の記述せんとする對象を出來得る限り收集して、歴史を敘述するなり。その場合彼の判斷の規準は收集せられたる一部の材料によつて、ある時

期の個性を把握し、以て全体を形成するにあり。歴史の個物は何一つとして等しきものはなし。それが一片の布たりとも、或ひは石の破片たりとも、そのものに關聯して研究をなす歴史にとつては、價値の大小こそあれ役割を演ずるものなり。歴史認識はすべての歴史的事象に興味を有し、一部を無價値として排斥する事有之べからず。すべて史料となるものは歴史研究の對象と言ふを得べし。要するに歴史認識の選擇は題目の選擇によつてのみ選擇すべし。歴史は廣義の史料によつて形成せらるゝものなる故に、歴史は概括の理法によつて、組織的統一的に結合せしめたる學的系列とも言ふべし。吾人は歴史認識の主体たる主觀と、認識の對象たる史料との二つの要素に區別し得るなるも、兩者は歴史構成の不可缺の要素なる故、その重要さの程度に於て、主觀が主力にして史料はその主觀によりて統率さるゝ從者の如きものには非ず。郷里の森とか泉とか等の資料は吾人の現主觀が生き込む事によつて、それを内面より充分に統合し切る時、吾々の少年時代てふ歴史は充分なる實存をえうるなり。若しかくの如き資料にして充分統率されず、多少なりとも自身の獨立を維持するあらば、その獨立維持の程度に従つて、吾々の少年時代の歴史はその歴史の實存の度を薄めて、素料的物質の存在に席を譲り行くなり」と。然れどもかくの如く論する場合、存在たる歴史の對象は單に吾人の少年時代の郷里の森或ひは泉とか言ふが如きものなるか。然らば吾人の郷里の自然に對して懷古の情をいだくてふ事は學としての歴史叙述の形態に對して何らの關係なし。吾人の歴史の對象は個性を有し、その對象そのものに、恰も日の光を浴びて輝く黄金の雨の如く、吾人の理性認識をうけて、ある神秘的様態にて光を現はす如きものなり。その間には單なる懷古の念（勿論歴史家は古を愛する事を要するなれど）によつてのみ意義をもつてふ事は眞に科學的方法とは言はれず。吾人言ふ歴史的主觀とはかくの如き事象と接觸して、事象を意義あらしむるものには非ず。歴史的事象そのものに於ても一部の歴史面を表象する故に、事象そのものにも主體的價値あり。故郷の樹木の現主觀の統帥によつて、始めて歴史的實存をうるが如きには非ず。歴史的資料そのものに價値あり。廣義の史料は歴史事象の認識の根源にして、我々の歴史認識によつて史料を歴史的事象たらしむるなり。かく觀ずれば歴史に於ける、無數の些細なる個物の意義も自ら明白な

るべし。故に史料と存在としての歴史と歴史認識は三位一体の姿にあり。史料を以て父となすなり。更に又少年時代の歴史てふ事は果して眞の歴史學の對象たりうるや。傳記を記述するは藝術家に非ずと。傳記を以て單に現在に存在する自己の過去に對する反省てふ意味にて書くなれば、それは歴史學的敘述とは言ひ難し。然れども又傳記にして歴史に於ける個人の意義を闡明するを主眼として、書かば充分史學の價值を與ふると言ひ得るなり。而して歴史としての傳記と雖も、多くは個人の一生涯を中心とし、その時代を單に背景として別に考慮に入れず、個人を大きく書き出すを目的とする故に、傳記を以て史學研究の補助となして、學ぶ事はありても歴史としては、余りに偏狹と言はざるべからず。要するに傳記を敘述するものは傳記作家にして、歴史家の傳記を記述する場合と雖も、歴史家の一時假に頽落して傳記作家なるに外ならず。

吾人の史料と稱する場合多く文献を指示し、更に史料文献中には過去の歴史敘述書は重要な位置を占む。かくして敘述としての歴史が史料の位置に移る事となるなり。依て以て歴史は書き更へらるてふ事となるなり。然して歴史は書き更へらるとは如何なる事なるや。先づ第一に從來の歴史記述の基礎となりし史料の虚偽或ひは不確實の暴露、新らしき史料特に今まで用ひられし史料と矛盾せる史料の發見等によつて、全体としての歴史記述の一部に變化を齎し、或ひは根本的變化を生ぜしめらるる故に歴史は改變せらるべきなり。而して若し史料の狀態に何等の變化なき時、或ひはより合理的なる解釋の出でざる時は、歴史敘述に根本的變化は生ぜざる筈なり。歴史は現在を中心として、總てのものを食ひ盡すタイムの流れに押し流されし過去を觀察し判斷するなり。而して歴史は現在に於て全体としての完結性を有するなり。歴史の意義は歴史的現象をそれ自体に於て存在せしまに、恰も昨日町にて蓬ひし人の姿を今日追想し、如實に眼前に彷彿たらしむる如く認識するを理想とするなり。かくして出來得る限り、主觀の偏見を消し去り、過去をありのままに再現する事肝要なり。而して歴史的現象の全体と關聯する個性的意味はそのありしままの姿に於て評價せらるべきなり。されば過去の歴史書に於ても歴史現象をありのままにそれ自体に於て把握するならば、何を以て歴史を變更する

要あらんや。歴史事象の全体に於ける、價值は事象有在の姿に於て、即ちありのままの姿に於て價值關聯を有するものなり。而して意味的價值は事象の存在そのものに比し、第二義的なるものなれば、個々の存在事實こそ歴史の根源なれ。吾人の現在的關心即ち現在に影響あるものを、歴史事象より選擇し、現代の立場より歴史的に重要とみらるる事件及び關係を取り上げ叙述する、かくの如きも勿論歴史の一種なり。而して歴史事象中重要な存在は、現在を中心とせずとも、その時代に於ても重大なる事象にして、大なる影響力或ひは一般性を具有せし事象なり。歴史に於ては現代的關心のみを中心とせず、自己の現在的主觀を去り、現在と全然遊離せる事象もある故に、現在を超越せる認識記述も必要なり。一時代に限りその特殊性を探索する歴史記述の如きこれなり。かくの如き場合は現在の立場よりの價值關係より見る要もなく、事象そのものを純粹認識によつて追求すべきなり。吾人は歴史認識の客觀性によつて、事象そのものに突入しうるなり。中世人の記述せる歴史書を以て、現代人との歴史認識の相違より見て、歴史は書き變へらるべきなりと言ふは、畢竟科學的客觀的歴史認識に缺くる處ありし過去人の歴史認識の不完全さによるものなり。されば過去人に於ても若し客觀的歴史を叙述する人あらば、何すれぞ根本的に書き更へる要あらんや。然れども吾人は現在に生存する故に、未來の歴史・吾人の死後に生起したる歴史事象の如きは知る能はず。然れども現在までの歴史は、それ自体の存在の姿に於て、吾人は客觀性を以て認識しうるなり。吾人の歴史認識は少くとも、現在までは客觀性ある完結性を有し得るものなり。而して吾人の歴史認識は過去人より歴史秩序に於て、長き全体を身につくる故に過去人より正しき認識をしうるとは限らず。認識に於ける純粹客觀的範疇は時代の波によつて、浮動し或ひは單なる體驗によつて進歩するものとは考へられず。もし以上の如き認識の立場をとらば、未來の歴史を加ふる事により増大する歴史秩序も、單に個別因果的に繋合する事によつて書き加ふべし。然れども吾人は後世人の歴史認識に於ける、より合理的解釋を望むなり。かくして歴史學は進歩を續くるなり。吾人は歴史認識に於て、歴史事象の全体的價值づけよりも、事象それ自体の存在の姿を知るを前とす。吾人は事象の價值を知るよりは寧ろ、事象の特殊的個性を洞察するなり。歴史事象には多面性あ

り、而して一の個別的因關關聯は一方的に方向を規定せらるるなり。されば過去の歴史事象と現在との影響的因果系列は、根源的概念によつて決定せらる。然れども歴史事象を一定の塑型にはめて、目的論的に繋合するは一方的見解と言はざるべからず。歴史を現在の關心によつてのみ規定するも一方的なり。歴史記述書は一つの藝術品の如く、完成せるものにして、吾人の一筆も加ふべからざるものなる故、その根本概念に於て吾人と異るとは言へ、その藝術性は尊重すべきなり。然れども吾人の歴史は科學的客觀性を有せざるべからざる故、過去人の歴史認識と雖も、客觀性を有するに限り、根本的に書き改むる要を認めざるなり。歴史は概念による表象には非ず、事象そのものの存在は吾人の關心より獨立して意義を有するものなり。各々の新らしき現代は、過去の歴史敘述の特に歴史的と認めたるものを、最早かかるものとは見做さず、他のものを歴史的に重要なものと見做す。然れども過去の時代に歴史的重要性を有すと見たるものも、現代よりみて重要性を失ひたるとは考へられず、現代的關心の移りたるによるなり。現在の關心とは必ずしも、歴史の全体的變更の關心によるイデオロギー的關心に勿論非ず。單なる興味的關心の移りたと見るべきなり。興味的關心は歴史全体の一側面のみを表現したるものなり。吾人はかくの如き現代的關心を以て、歴史の書き更ふべき根本動因となす事を拒むなり。歴史記述の變化は單なる關心の移動にして、歴史の全体性に於て何等の關係なきものとするなり。かくの如きは題目の選擇なりと、一括して見て充分なり。吾人は歴史の客觀性を尊ぶ。そは歴史の各部門的研究により、歴史事象の多面性を表し、一を強調し、他を一時認識の外すなり。

吾人は史料によつてのみ歴史を編成し、歴史的眞理を認知しうるなり。史料は化石したる貝殻にも似たる一つの鑄型に過ぎず、かやうなる貝殻の背後には一個の動物あり、かくの如き記録の影には、一個の事實の存在したるなり。貝殻といひ記録といひ、それ事体にては單なる生命なき遺物にして、完全なる生命に満ちたる存在を表示すべき手段として以外には、價值なきものなり。この生命の充満したるものにまで到達せざるべからず。かくの如き存在こそ再構成すべく努力せざるべけれ。歴史家は時間てふ隔りを打破し、生々しき生命を具へたる存在を恰も街にて別れきたる人の如く



明確に完全に識別しうる時、眞の歴史は完成せらるるなり。それ故吾人は眼を以て心の眼を以て、觀察の障礙となるべき時間てふ大なる距りを、出來うる限り除却すべきなり。現在にては最早困難なる現在的・個人的・直接的・可感的觀察を出來うる限り、完全なるものとすべし。それは歴史的存在を認識すべき唯一の道なり。過去を現在たらしめよ、而して不在の事物につきては、經驗を有する事なき故に、一事物を判斷せんとするも、それは現在に非ざるなり。吾人は到底過去の事物を完全理解する能はず。茲に理解するとは過去の事實をそのまま、現在に再現するの謂なり、過去の事實は後世より想像しうるのみにて、想像の眞相に近きを以てよしとし、合理的なるを尊ぶなり。かくの如く過去の再認識は不完全たるを免かれず、然れども吾人は歴史を認識しうるなり。余は今ここに歴史認識の確實性の規範として、一般歴史哲學書に屢々引用さるるオット・ブラウンの所説を擧げて、更に論ぜん。曰く、「先づ第一に自ら實驗して確實性を認知する事、次に個別的認識を實際に全体の中に排列する事、及び他の鑑識に一致する事の三つを必要とす、而して何より先に著者獨自の理性認識こそ決定的審判官なれ」と。第一の自ら實驗して確實性を認識する事は史料に直接接觸して、その眞偽を判別する事を意味せば、自ら直接史料に關して、特に新史料に對して批判するの必要あり。ゲーテの諷刺を吾人はこれに關して想起するなり。曰く、

“Was ihr nicht rechnet, glaubt ihr, sei nicht wahr”

次に個別的認識をば實際に全体の中に排列する事、即ち我々の認識を他の己に定在せる關係中に排列して批判する事は、歴史的個体と全体との關係を語るものにして、史料の眞實性を判斷する理性的・直觀的認識の規準を問題とするなり。然れども吾人の歴史認識も史實の眞實性より發して、構成するに際してのみ、眞の歴史認識を完成しうるなり。而して歴史的個物を全体中に排列するは、歴史的全体と歴史的個別体との相互媒介による、ある神祕的過程に屬するものなり。史料の確實性は同時に、個別的認識の全体的位置付けにより、確實性を附與せらるるにより、その心的過程は同時と言はざるべからず。されば實驗せらるる確實性は同時に全体中に於ける、繋列の合理性を具含するものなり。次の

他の鑑識者に一致するてふ事は、歴史的存在の客觀を助長し、主觀的蓋然性を客觀的確實性に變ぜしむる重大なる役割を演ずるものなり。而してこれも著者独自の理性認識によりて、實証的にして最も可能性の大なる認識に至らば、何すれぞ他者の誤まれる鑑識に心を止めんや。歴史認識は要するに直觀による事實認識なり。

然らば歴史に於ける全体と部分とは如何なるものなるか、如何なる關聯を有するものなるかにつきて論を進めんとするなり。歴史の全体とは單に時間系列による、歴史全体の完結を示し、部分とは歴史秩序全体に於ける、意味ある排列を受くものを意味するのみならず、歴史認識に於ける全体とは勿論かくの如き時間的全体をも含めども、更に認識者の集積して無意識的に排列されたる知識全体を意味し、部分はその對象たる部分に集結されたる認識の心理的定位置を言ふなり。認識者は單に歴史の時間的全体の中に没入して、時間的全体に於ける部分の因果繫列による定位にのみ把はるる事なく、超時間的認識の位置に立ち正しく認識すべし。即ち歴史的扮飾を解きたる眞の人間性に於て、時間的人間の中にあつて、超時間的人間となりて、眞の客觀性を見出すべし。然れども逆に歴史的扮飾そのものを見る事も同時に必要なり。吾人の知識は無慮なり、而してその心的表象も多種多様なり。然れども事實の認識そのものに於ては、事實の存在事實そのものの認識は多様ならず恒に一歸するなり。かくの如き全体性によつて、純粹に部分を抽出し、更に逆に全体によつて制御せば眞を得るらん。而してその認識過程には常に神秘的なる心の働きと、その合理的基礎づけを必要とするは勿論なり。かくの如き漠然たる全体は單に自然的原素の集には非ず、それを統制する心的機能の力によつて、左右さるべき高次の精神的存在なり。その全体は無数の而も他とは異なる個体の有機的集合なる故に、その中に必然的に個性を有す。然れども凡ゆる個性の中には、同一の諸機能と諸要素とを含有するものにして、種々の個性の素質はその強度の度合によつて、相異するのみなり。かくの如き凡ゆる生の表現は、それが同一の生の表現なる限りは、異なる素質を有する個性と雖も共通に理解されうるなり。解釋に於ては主觀性と客觀性とは統一せられて、絶對的客觀性となるなり。主觀性は色々の異なる要素を含み、然も異なる統一を生ずる。而してその客觀性を獲保するは、各人の

感性と理性に訴へて、同一の事實と認めらるる事によるなり。かくの如くならずんば、歴史認識の客觀性は到底望めざるなり。

歴史秩序中に於ける縦の全体は、歴史の個々の事象を解釋する解釋者の時代に至るまでの、全歴史的發展の全系列を言ひ、それを究極的に規定する所の全体として有するものと言ひうるなり。一の精神的所産に於ては、その現實の狀態と主体の狀態とは、共にその時代以前の及び以後の全歴史的發展の系列中におかれて、始めて一義的意義を指定せらるゝなり。精神的所産の個性は全歴史系列に於ける個性、而も獨自の存在なり。さればその生産されし現實の狀態と、他方にはそれを生産せし主体の目的性傾向性に現はるゝ、主体の狀態に關聯せしめて解釋する事により、全体より解釋せらるゝと言ひうるなり。歴史に於ける一つの精神現象は、他と類比する事なしに本來おきかへられぬ存在なり。歴史秩序に於ける全体は、歴史的所産を超えて、解釋者の立つ時代にいたるまでの歴史全体、即ち人類の歴史的發展に應じて究極の基礎となるべき歴史の無限の全体なり。吾人の立つ歴史的位置は、無始無終の時間系列の一點なり。然れども吾人の立つ歴史的位置よりは、過去の歴史全体は完結せられたるものなり。かくの如き歴史に於ける全体は時間的經過と共に、球のふくれるが如く、擴大するものに非ず、附加的に長大となるのみなり。歴史の領域に於て諸事實を相關係させ得る最も廣汎なる全体は、全發展に於ける人類の歴史即ち世界史なり。その場合に於て如何なる廣さに互つて、全体を規定するかは、選擇せられし主題の把握の仕方如何によるなり。併して國家史、教會史、個別時代史等に於て、とらるる全体は形態に於ては、畢竟人類史てふ大なる全体の一部に過ぎず。かかる部分的全体の内に於て、發展契機として自己の位置や意義を、認識尊重せる各事實や事實の複合は、上述の全体の部分と見る事によつて、初めて大なる人間發展全体の裡に於ける、その位置や意義を指定せられ、此を保有するなり。かくの如くして最も遠き事件も、最も近き事件も何れも一大關聯中に立てらるるなり。然れどもかくの如き大全体と部分とを因果的に結合せしむるは、世界史の理念なり。而して何れの一部分も廣大なる全系列中に、横はる肢節なれば、史學研究の領域に於ては、廣き人間性の統

一的關聯を明確にする事肝要なる要素となるなり。時代の推移と共に解釋に於ける全体の、根本的に變するものに非ず。歴史的現實の規範によつて、解釋の相違するといふ事などは、歴史的対象の本來の存在の姿にとつては、どうでもよきものを附して觀察すると言ふべし。吾人は歴史の認識に於て一つの所産に對して、主觀的批判或ひは、人物等に對する好嫌の念をもつは當然なり、然れども學としての歴史學に於ては、かくの如き主觀を根本とし、それに從つて想像的認識を加ふるものは不可なるべし。主觀はあくまで主觀にして、かかる觀を超越し把はるる事なく、ありのままの姿に於て対象を認識せざるべからず。イデオロギー的歴史觀に於ても、その歴史批判に於て中正を失はず、誇張に走る事なく實證的考察を行はば、それも一つの歴史叙述の方法ならん。而してその一つを誤りても眞の歴史を記述せるとは言ひ難きなり。歴史認識に於ては認識的興味の獨立によつて、始めて純粹な學として成立しうるなり。歴史は獨自なる性質の材料の純粹認識を目標とするなり。吾人は普遍人間的恒常の性質よりすべてに對して、關心を有するものなり。歴史は何等かの關心によつて、動機づけらるる可能性は存在することなれど、プロレタリア科學は發展的な見地に立つに反し、ブルジョワ科學は靜止的な見方となるなりと言ふが如き、學以外の感情的關心は純粹なる學としての歴史の根本動機となり、學全体を貫くものとなるべからず。吾人の歴史學は關心によつて出發する事あるも、認識的關心を超越し更に合理化する事によつて、純粹認識をうるなり。歴史的現象も自然科學とは異なる、生に近き特殊の方法によつて、實踐的關心の干渉より獨立せる認識的對象となりうるなり。歴史の材料を理解し解釋する所に、本來の意味の歴史は始まるなり。故にそれは生命あるままに、實踐的關心を實踐的關心として理解すべきなり。併して實踐的關心を理解するは、實踐的關心を以て生に對するとは、意味を異にす。理解は觀照の立脚地に立ち始めて可能なり。

次に歴史的認識の方法論的知見を明らかにし、以て根本的且つ本質的に鮮明せん。歴史は人間の精神的所産なる故に、一片の遺物と雖も、その背後に個性的人間の存在するなり。而して歴史認識に於ては、個々の対象に於ける人間の認識なり。かくの如き歴史的人間は恒に歴史的集團の中に於て、活動する故に、歴史認識に於てかくの如き歴史的全体

と個との關聯を認識の根本問題とするなり。余はここに歴史認識の方法論的知見を開明せんために、四つの段階に分ちて論ぜんとするなり。(一)時間的表象 (二)全体的表象 (三)個体的表象 (四)綜合的表象 これなり。吾人は歴史的認識に於て、先づ第一に個物を時間の相の許に於て觀察し、歴史的個物の時間的位置を直觀するなり。これは史料批判に於ける時代判斷をなし、歴史の實際的作業方面の認識の根本をなすなり。かくの如きは吾人の認識の對象の過去の全系列の一つに屬し、時間的に定位されたるによるなり。これ歴史認識に於ける第一の階梯なり。余は之を名付けて時間的表象と言ふなり。これは歴史に於ける時間を、自己の中に移入し以て表象とするなり。かくして時間的に表象せられし、歴史的個別はその對象のになふ象徵性具象性によつて、その意味を開明せらるべきなり。歴史に於ける個々の事象は、歴史的全体に於て代表的概念を有するものにして、個物は全体に於て培養せらるるものなり。されば全体は環境の意味をになふものとなるなり。かくして個体と環境の全体との關聯を考察すべきなり。この段階に於ては全体によつて培はれたる個物を、全体のもとに於て觀察する。歴史に於ける環境の全体は、歴史の秩序に於ける系列の全体とは異なる横の全体なり。かくの如き全体は歴史的過去を積蓄し繼續せるものなり。それは全体として獨自の一完結体を構成せるものにして、その許に於ては不動的必然的性格を有するものなり。ミリュウの全体は個体の意志的・偶然的・創造的なるに反し、個体を制約し規定するものなり。而してかかる全体はその動力即ち自然因果の力學を以て個体を束縛するものなり。更に吾人の歴史に於ける全体の認識も、又表象的にして、吾人の心の鏡に映ずる表象を以て、全体を浮出せしむ。されば表象は感性的にして個々の事象の有機的集合即ち、統制されたる全体を以て組織さる。されば歴史的全体に對する認識は、要するに感性的に統一せられたる、有限的にして無形的に擴りしものなり。かくの如き性質を有する認識者によつて、認識せらるる全体は有方向的にして流動的勢力を有するものと觀ぜらるるなり。かくの如き力の相の許に於て、觀察せらるる全体を表象するを以て第二の段階とするなり。而して歴史的全体とは個体を、圍繞せる空漠たる全体たる事もあらば、その個体以外の全体の一部、即ち全体の象徵を明白に表示せる個体の集合たる事もあ

り、而して何れもその個体より一層明白にして、その根源を規定するものなり。この全体を中心として觀照する段階を、余は全体的表象と稱するなり。次にかくの如き全体に影響せられたる個体の表象を、歴史的個体それ事体の相の許に觀するを第三の段階とす。歴史的個体そのものの見地に於ては、個体は現實的力、即ち浮動せる可能性を實現に齎らす、創造的意志的性格を有するものとして觀するなり。かくの如き意味に於て個体は全体を動かし、創造も流動せしめゆくなり。而して亦個体は全体の代表概念にして、全体は個体によつて表現せられ、現實的力を表示するなり。されば歴史的全体は個体によつて、その自然因果的動力を制限せられ、反撥せらるるなり。かくして個体によつて全体は、從來とは異なる仕方に於て動かさるるなり。而して個体は全体に比して、一時的遊浮的性格を有するものなるため、個体自身にては如何ともしがたき運命的必然を先天的に、荷ふものなり。全体はこれに反する性格を有するなり。されば個体は全体に、全体は個体に相互影響しつゝ、歴史を刻み行くなり。而し三の段階に於ては、吾人は個体をその實體の根源に歸入して、個体そのものの姿を力あるものとして、個性の法則を有するものとして、考察し以て表象するなり。かくの如く個体を自己の内的體驗に於て觀照し、以て表象するを個体的表象と稱するなり。この段階に於て吾人は歴史的認識の對象を、自己の内面にひきよせ、それ等を個体の見地に立脚し、個体を主として觀照したるなり。而して以上の三つの段階を経て、第四の綜合の段階に入るなり。最後の段階は個々の事象を、時間性に於て、全体性に於て、或ひは個体性に於て、綜合認識しその合理的可能性の大なる點を綜合批判し、最後の決定を下すなり。綜合批判は純粹認識の範疇によつて、最も正當とみらるべき可能性の大なる程度に應じて、合理的なりと決定す。即ち歴史的個体の立場に於て、認識し、その狀態の現實動力の大小を觀察し、更に又歴史的全体の狀態を認識して、その可能性を認識するなり。而して以て綜合するなり。この最後の階段を綜合的表象と稱するなり。以上の歴史認識の方法論的知見は、觀照の立場によつて對象を認識したるものなり。かくの如くして時間と全体と個体を、單獨に然も他と相互關聯のもとに於て綜合認識せば完全なる歴史認識を行ひうるなり。（昭和辛巳臘月、新世界史將來之秋、於大江寓居）